

巻頭言

## 専門職大学院としての教職大学院

小松原 修\*

### Teaching schools as professional graduate schools

Osamu KOMATSUBARA\*

教職大学院について、文部科学省は、「近年の社会の大きな変動の中、様々な専門的職種や領域において、大学院段階で養成されるより高度な専門的職業能力を備えた人材が求められています。教員養成の分野についても、子どもたちの学ぶ意欲の低下や社会意識・自立心の低下、社会性の不足、いじめや不登校などの深刻な状況など学校教育の抱える課題の複雑・多様化する中で、こうした変化や諸課題に対応しうる高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教員が求められてきています。このため、教員養成教育の改善・充実を図るべく、高度専門職業人養成としての教員養成に特化した専門職大学院としての枠組み、すなわち「教職大学院」制度が創設」と記載している。

上記のように現在、高度専門職業人として教員は期待されているわけだが、一方で全国的に各都道府県において教員採用試験の倍率が軒並み下がっており、人数のみならず質の低下も危惧される。授業力や指導力といった学校教育における専門性が継承されないこと、また経験に基づく知識を教育可能な知識となるまでメタ化できていないことが大きな課題である。

これら全てを踏まえ、教職に対する魅力が下がっていることに対して、現場で勤務していた立場としても、また実務家教員としても改めて教職の魅力や専門性について考えなければいけない状況にあると考える。

令和3年1月26日の中央教育審議会答申の中で、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」を実現するための教師の姿として求められる教師像に、教職生涯を通じて

学び続ける教師が挙げられている。

現在の日本社会においては、新しい知識や情報だけを学ぶことを学びとは捉えられていない。新しい知識や情報を活かし、答えのない問題に立ち向かう姿勢やアイデアをゼロから生み出し、実行する力などを自ら育むことこそが学びだと捉えられている。そして、これまでの経験や社会に散在する知識を、新たな知の体系へと昇華させ、それを伝達・継承する能力が学校教育においても強く求められてきていると考える。そのためには、実践と理論を融合し、他者に伝達可能な新たな知を自ら作り出すことが必要となる。さらに、そのように生み出された知を学校教育の現場へ実装していくことが求められている。

学校現場における諸課題に対して対応できる人材を育成するだけでなく、諸課題から新たな価値を生み出す人材も育成していかななくてはならない。現在 Z 世代の多くが、既存の職業ではなく、新たな価値を生み出すスタートアップに関心を持っていると聞く。学校教育、それも教職に対しても、ネガティブなイメージではなく可能性を大きく感じられるような変革は大いに求められている。

その変革ができる場こそ専門職大学院の役割であると考え。そして、この大学院に関わった者達が学校教育現場に新たな価値を創り出し、児童生徒だけでなく地域社会に対しても、教職の魅力を発信する場として、教職大学院が貢献できることを強く願う。

(2023年1月31日 受理)

\*佐賀大学大学院学校教育学研究科